

## 復活節第4主日礼拝説教「命のパンをどうぞ」

日本基督教団石神井教会 2019年5月12日

### 【旧約聖書日課】出エジプト記 16章4～16節

<sup>4</sup>主はモーセに言われた。

「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。<sup>5</sup>ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

<sup>6</sup>モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。

「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、<sup>7</sup>朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

<sup>8</sup>モーセは更に言った。「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々が何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

<sup>9</sup>モーセがアロンに、「あなたはイスラエルの人々の共同体全体に向かって、主があなたたちの不平を聞かれたから、主の前に集まれと命じなさい」と言うと、<sup>10</sup>アロンはイスラエルの人々の共同体全体にそのことを命じた。彼らが荒れ野の方を見ると、見よ、主の栄光が雲の中に現れた。<sup>11</sup>主はモーセに仰せになった。

<sup>12</sup>「わたしは、イスラエルの人々の不平を聞いた。彼らに伝えるがよい。『あなたたちは夕暮れには肉を食べ、朝にはパンを食べて満腹する。あなたたちはこうして、わたしがあなたたちの神、主であることを知るようになる』と。」

<sup>13</sup>夕方になると、うずらが飛んで来て、宿営を覆い、朝には宿営の周りに露が降りた。

<sup>14</sup>この降りた露が蒸発すると、見よ、荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが大地の霜のように薄く残っていた。<sup>15</sup>イスラエルの人々はそれを見て、これは一体何だろうと、口々に言った。彼らはそれが何であるか知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである。<sup>16</sup>主が命じられたことは次のことである。『あなたたちはそれぞれ必要な分、つまり一人当たり一オメルを集めよ。それぞれ自分の天幕にいる家族の数に応じて取るがよい。』」

### 【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章34～40節

<sup>34</sup>そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言うと、<sup>35</sup>イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渇くことがない。<sup>36</sup>しかし、前にも言ったように、あなたがたはわたしを見ているのに、信じない。<sup>37</sup>父がわたしにお与えになる人は皆、わたしのところに来る。わたしのもとに来る人を、わたしは決して追い出さない。<sup>38</sup>わたしが天から降って来たのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。<sup>39</sup>わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。<sup>40</sup>わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。」

## 「パンをください」

「主よ、いのちのパンをさき、与えたまえ、われらに」と歌い始める讃美歌 56 番は、茶色表紙の『讃美歌（1954 年版）』（187 番）では、「主よ、いのちのこたばをあたえたまえ」という歌い出しです。茶色表紙の『讃美歌』に親しんでこられた方も多いと思いますし、わたしもそちらで青年時代までを過ごした者ですから、思い出深く口を衝いて出て来る歌詞はいまだにそちらである場合が少なくありません。実際、礼拝では両方の讃美歌集を用いていますから、曲によって使い分けているのも、多分に牧師個人の好みが反映されているのが正直なところです。けれども、今歌ったこの讃美歌を選ぶときには、わたしは必ず、『讃美歌 21』で歌うことにさせていただいています。これまでの「主よ、命の言葉を与えたまえ」ではなく、「主よ、命のパンを裂き、与えたまえ」という歌詞こそ、主イエスを思い起こすのにふさわしいと思うからです。

「主よ、命のパンをください」。わたしたちは、そう願います。もちろん、「命の言葉をください」と願ってもよいのです。けれども、主イエスがお与えくださるのは「パン」です。今日の福音書日課（ヨハネ 6 章）の直前には、主イエスが五千人の人々にパンと魚を分け与えてくださった出来事が伝えられていました。各福音書を開くと、主イエスが多くの人と食事を共にし、特に世間で蔑まれていた人々、「徴税人や罪人」とひとくりにされるような人々ともしばしば食事を楽しまれていたことがわかります。弟子たちと過ごした最後の晩も、主イエスは彼らとの食事の席を設けられて、彼らに「パン」を裂いて分け与えるということをしてみせてくださったのです。

イースターを祝ってからの「復活節」に、わたしたちは、ご復活のキリストが共にいてくださることを御言葉から聞き、その信仰を確かめてきました。そのたびにわたしたちが耳にしてきたのは、ご復活の主イエスが食事の席においてくださるお方だということです。一度死んでご復活されたのならば、もう食事を摂ることなど必要のない体になられたのではないかと、とも思いますが、そうではないのです。ご復活の主イエスこそ、食事と共に、食べることと共に現れてくださるお方なのです。

「主よ、命のパンを裂いて、わたしたちにお与えください」と歌い、また祈り願うのならば、わたしたちは、本当にパンが裂かれて与えられるということを経験して知っていなければ意味がないでしょう。裂かれたパンを与えられて食べるとは、本当にわたしたちが口にするのできる食糧があって、相手の手でそれが裂かれて分けられ、一人ひとりに分配されて与えられるということです。その経験をしていなければ、それを求めることはできません。その意味を理解することはできません。孤食が当たり前の社会に生きているならばなおさら、わたしたちは、そのことを経験する場を、どこかに確保しなければならないのです。

「パンを裂いて、分け与えられる」経験をjする場。教会は、間違いなくそのような場です。礼拝中に執り行われる「聖餐」はもちろん、教会は「パンを裂いて、分け与える」場として営まれるために、立ち続けてきたのです。

## 天からのパン

教会で飲食の集まりをすることを好まない人たちもいます。皆さんの中にも、そのような集まりは苦手だという方がいるかもしれません。そのような方に無理強いすることはありません。けれども、わたしたちが実際に教会という場に集められ、営みを重ねることを許されているのならば、機会あるごとに「食事」の機会を設け、皆さんをお誘いするのは当然でしょう。何よりも、主イエスがそのようになされたお方だったのですから。そのことによって、仮に主イエスのように「大食漢で大酒飲みだ」と批判されても、それは大いに名誉なことでしょう。

「しかし、その飲食の経費は、どこから出すのか」と心配される方がいるかもしれません。「そういう会をするならば、ちゃんと必要経費を会費として集めるべきだ」と考えるのも正論です。けれども、わたしたちが教会の営みのために「パンをください」と本当に願うならば、それは「天から与えられる」というのが、わたしたちの信仰なのです。

旧約聖書日課（出エジプト記 16 章）には、モーセによってエジプトから脱出してきたイスラエルの人々が食事のことで不平不満を爆発させたときに、神が「天からパンを降らせる」とお告げくださり、あの「マナ」と呼ばれる食べ物が与えられた有名な出来事が語られていました。それは、彼らがエジプト中を襲った「初子の災い」を「過ぎ越しの儀式」で逃れ、エジプトを脱出してから、およそ四週間後のことだったとされています。わずか一か月前に神の不思議な御業によってエジプトを離れることになった人々でしたが、そのことも忘れたかのように彼らはエジプトでの生活を懐かしみ、現状に不満を募らせていたのです。

エジプトで、彼らはファラオの奴隷の身分でした。それでも、奴隷として従っている限りは、パンも与えられ、肉鍋を腹いっぱい食べることも許されていたのです。とは言え、平等にそれがなされていたのかは、疑わしいと思います。同じ奴隷の身分といっても、その社会でうまく立ち回り多くを得る者もいたでしょうし、正直に生きながらも損ばかりしていた者もいたはずです。人間の社会は、古今東西、おのずとそのような格差を生じさせてきました。

そのようなエジプトから導き出されてきたイスラエルの人々が「パン」を求めたとき、神は「天からのパン」をお与えになられたというのです。それは、皆がそれぞれ「毎日必要な分だけ集める」ことができる、というものです。集めるのが得意な者が独り占めできる、というようなものではありません。集めるのが苦手な者が得られずに終わってしまう、というようなものでもありません。神の与えられる「天からのパン」は、一人ひとりが必要な分だけを得られるように分け与えられるのです。そのようなパンとして、与えられたものを分かち合うことが、神の「指示（トーラー＝律法）」されたことでした。

主イエスは、この「天からのパン」を分かち合うという神の指示を思い起こさせ、また実践なさるために、あの五千人の食事の奇跡をなしてくださったのです。教会が食事の営みを行なおうとするとき、わたしたちは、このことを思い起こします。神の指示と主イエスの実践こそが、わたしたちの行動基準だからです。

## 「わたしが命のパン」

世の中の人々が教会の営みを見、またわたしたち個々の行動を見て、「そのパンをいつもわたしたちにください」と求めてくるようになること。それは、教会が二千年間、願い続けてきたことです。願ってきただけでなく、実際に、教会やキリスト者がそのような求めに応えることのできる存在として用いられてきた歴史を、いくらかでも数え上げていくことができるでしょう。とは言え、わたしたちは、ただ社会の食糧分配制度を平等にするための提案をしているだけではないはずです。そのようなことは、政治家たちが為すことです。

主イエスは、そのような求めをもって近づいて来る人々に向かって、おっしゃられました、「わたしが命のパンである」と。これが、「天からのパン」を分かち合うという神の指示を実践なさった主イエスのお答えなのです。

それは、わたしたちが讚美歌で「命のパン」を「命の言葉」と言い換えてきたとおり、主の御言葉をいただく、ということでもあるのでしょうか。実際、主イエスは、荒野で誘惑をお受けになられた体験を弟子たちに語って、申命記の御言葉から「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」（マタイ 4:4⇨申命記 8:3）と教えられました。「わたしが命のパンである」と主イエスがお告げになられたのも、わたしたちの生き方を本当に形作る言葉として神からの御言葉を聞こうとするならば、主イエスを通してこそそれを与えられるということなのだ、わたしたちは当たり前前に理解しています。これも間違いなく真実です。わたしたちの言葉、その言葉の背後にあるわたしたちの価値観や思想、それこそが、主から与えられる「命の御言葉」によって養われ、形作られ、語り出されるようになるべきです。しかし、そうであるならば、教会は、ただ聖書を開いて主の御言葉を教えていれば事足りるのでしょうか。

主イエスは、この場面の続きで、繰り返し「わたしが天からのパンだから、これを食べよ」とおっしゃいます。「わたしの肉を食べよ、血を飲め」とおっしゃる。そのあまりにリアルな言い方に嫌気がさして多くの弟子たちが離れて言ったほどだったというのです。にもかかわらず、主は、そういう言い方をされたのです。「本当にわたしを食べなさい」と、「本当にわたしの命を裂いて、あなたがたに分け与えるから、取って食べなさい」と言われるのです。

それこそが、主イエスの生き方だったのではなかったのでしょうか。弟子たちにお示しになられた、後に続いて倣うべき生き方の実践だったのではなかったのでしょうか。「わたしが命のパンである」と言われて、ご自身の命、その生活も人生も持ち物もすべてを裂いてまで与え尽くそうとされたお方から、わたしたちは、新しい命をいただいたのです。その新しい命は、それをいただいた者が、今度は自分のことを「わたしが命のパンです」と言って分け与えていくようになる命なのです。「命のパン」であるキリストと一つになる命なのです。

それが、教会にはあります。求める人々に分け与える「命のパン」があります。裂いて分け与えれば分け与えるほど多くの人に行き渡る「命のパン」があります。わたしたち一人ひとりこそが、「命のパン」となるのです。